

恩讐の彼方に

極悪

若い旅人夫婦を手にかけた市九郎は、深い良心の苛真にとらわれながら帰って来た。そして家に入ると、すぐ様、男女の衣裳と金とを、汚らわしいもののようにお弓の方へ投げやった。女はゆうぜんとしてまず金の方を調べて見た。金は思ったより少く、二十両をわずかに越しているばかりであった。

お弓は殺された女の着物を手に取ると、

「まあ黄八丈の着物に紋縮緬の襦袢だね。だが、お前さん！

此の女の頭の物は、どうおしだい。」

彼女は詰問するように市九郎を顧みた。

「頭の物？」市九郎は生返事をした。

「そうだよ。頭のものだよ。黄八丈に紋縮緬の着付じや、頭のものだって、擬物の櫛まがいのものや笄しょうがいじやあるまいじやないか。わたしは、先刻あの女が菅笠を取った時に、ちらとにらんでおいたのさ、瑇瑁たいまいの揃すまに相違なかつたよ。」と、のしかかるように言った。

お弓はさらに、殺した女の頭のものなどは夢にも思っていないかつた市九郎にむかつて、「お前さん！ まさか取るのを忘れたのじやあるまい。瑠璃だとすれば、七両や八両は確だよ。駄け出しの泥棒じやあるまいし、何のために殺生するのだよ。あれだけの衣裳を着た女を殺しておきながら、頭のものに気がつかないとは、お前は、何時から泥棒稼業にお成りだえ。何というどじをやる泥棒だろう、何とか言つてごらん？」

お弓は市九郎にくつてかかつた。

市九郎は、江戸浅草田原町の中川三郎兵衛の仲間奉公をしている中、主人の愛妾お弓と不義をしたのだつた。その不義が主人に知れ、老年の主人が成敗の剣を振り上げたとき、命惜しさに逃れようとしている内、つひ主人を斃たおしてしまつたのだつた。江戸を逃れて流浪の旅をつづけた果、今、木曾山中で悪事の数を重ねているのである。この女のために主人殺しの大罪を犯したのだつた。この女のために、底も知れぬ極悪の数々を重ねているのだと思うと、市九郎の心にはお弓に対する反抗心が勃然として湧いてきた。

二人の若い男女を殺してしまつた悔いに心の底まで冒されかけていた市九郎は、お弓から責められても、それを悔いる心はなかつた。それよりもお弓が、自分の同性が無惨にも殺されてその下衣までが、殺戮者に対する貢物として自分の目の前に晒されておりながら、なおその飽き足らない慾心は、さすが悪人の市九郎の眼をこぼれた頭のものにまで及んでいゝ。そう考えると、市九郎は、お弓に対する、いたたまらないような浅ましきを感じた。この市九郎の心の激変を全く知らないでなおも彼に残りの物を取つてくるように言った。しかし市九郎は考えこんで動かない。しかたなくお弓は殺した場所を聞いて、裾をはしおつて駄けだした。

新生のひらめき

自分の命を賭してまで得た女が、わずか五両か十両の髪の毛の物のために、女性の優しさの全てを棄て、死骸に付く狼のように、殺された女の死体を慕うてかけてゆく。市九郎は心の底から浅間しく思わずにはいられなかった。

彼はもうこの罪悪の棲家に、この女と一緒に一刻もいたたまらなくなった。

自分の今まで犯した悪事が、一々蘇って自分の心を食い割いた。

絞め殺した女の眸や、血みどろになった悪人の坤き声や、一太刀浴びた白髪の老人の悲鳴などが一団となって市九郎の良心を襲うた。

彼は一刻も早く自分の過去から逃れたかった。彼は自分自身からさえも逃れたかった。まして自分の凡ての罪悪の萌芽であった女から極力逃れたかった。

彼は決然として立ち上った！

彼は家を出た。そして今一度帰って、持つて出ようとした衣類もさつき金の金も悉く盗んだものであることに気づくと、それを家の上りがまちへ力一ぱい投げつけた。

お弓に会わないように、間道を木曾川に添うて一散に走った。どこへゆくといふ当てもなかった。彼はたゞ罪悪の根拠地から一寸でも、一分でも遠い所へ逃れたかった。

姦通！ 主殺し、駆け落ち、強盗、殺人、淫蕩………。

そこにも、悪質の腫物をかくような、不健全な快感がある。

貪れば貪るほど、傷の深さが増してゆく。これにも似たる不健全な趣味が誰の上にも開け易い。

道義を無視しなければ出来ない快楽、弱者に弾圧を加えなければ行い得ない快楽、多くの人を傷つけなければ行えない快楽、良心を殺さなければ行えない快楽、それに陥り易いのが人間性である。

しかし人間は如何に悪事に溺れても、何かの機縁にふれ、ば、その底に輝く晃々たる靈性に蘇る。

市九郎の心にこの輝きが生れた。

彼は今、失心したように、狂者のように走る。

彼はいったい何ものによられたのか。

我らは今微かに、彼の上に彼ならざる彼を見る。

尊き悲嘆

二十余里の道を、彼は山野の別なくただ一息に走って、あくる日の昼下り、美濃国の大垣在の浄願寺に駆けこんだ。市九郎は浄願寺の現住明遍大徳の袖にすがって、懺悔の真を致した。

上人はこの極重悪人も捨てなかった。彼は上人の手によって出家得度して了海と法名を呼ばれひたすら仏道修行に肝胆を砕いたが、道心勇猛のためか、わずか半年

足らぬ修業に、行業は氷霜よりも皓く、朝には三密の行法を凝し、夕べには合掌念仏の安座を離れず、二行彬々として豁然智度の心萌し、天晴れの智識となった。彼は道心が定まってもう動かないのを自覚すると師の坊の許しを得て、諸人救済の大願を起し、諸国雲水の放に出たのであった。

彼はまず京洛の地を志した。彼は多くの人を殺しながら、たとえ僧形の姿となっても、自分が生きながらえているのが心苦しかった。

木曾山中の罪悪を思えば、道中の人々に対して、償い切れぬ負担を持つているように思われた。道路で難渋の人を見ると、彼は手を引き腰を押ししてその道中を助けた。橋の破壊されたのを見れば修繕し、路の崩れをなおして、只管善根を積むことに腐心したが、身に重なる罪は、空よりも高く、積む善根は土堆よりも低いのを思うと、彼は今更に半生の悪業の深さを悲しんだ。市九郎は、些細の善根によつて、自分の極悪の償い切れぬことを知つて心を暗くした。

一言の悪が全人格の問題となる。

一行の罪悪が全人格の問題となる。

じつとしてはいられない。積んでも積んでも、いかなる善もこの悪よりも軽い。この悲哀に泣いたのが法然といわず、親鸞といわず、過去の聖者たちの心境ではなかったか。

自己の罪も悪も棚にあげて、悲憤し、糠慨し、怨憎する、その粗野な荒くれた心か？ raithたい何が生れよう。

使命

彼市九郎は、畿内中国を通つて享保九年秋、海を渡つて九州小倉に至り、豊前の国宇佐八幡宮を拝し、山国川を遡つて耆闍崛山羅漢寺に詣でんものと、道を山国川の溪谷に沿つてたどつた。

それは八月に入つて間もない時であつた。淋しい樋田駅で昼食をとつた了海が、更に山国川に沿つて火山岩の河岸を、杖をたよりにたどつて時、ふと、この辺の農夫であろう。四五人の人々が罵り騒いでいるのを見た。市九郎が近づくとその中の一人が、

「これはよい所へ来られた。非業の死を遂げた哀れな亡者に、通りかゝられたを縁に、一遍の廻向をして下され」と言った。

彼は経を廻向して、その死人の事情を聞いた。それは鎖渡しの難所の中途で馬が狂うたため五丈に近い所から真つ逆さまに落ちて無惨な最後をとげたのである。この難所では一年に三四人、多ければ十人も、こうした憂目を見るとのことである。

彼は絶壁の中腹に、松、杉などの丸太を鎖で連ねた栈道が、危げに渡つていふのを見た。かれはこの仰いで十丈伏して五丈、人の命をとるこの絶壁を見た。漸く渡り終つて絶壁を振り向いた刹那、彼の心には咄嗟に大誓願が、勃然として萌した。それはこの二百余間の絶壁をくり貫いて道を通じようといふ不敵な誓願であつた。

彼は求めて歩いたものが、漸くこゝで見つかった。一年に十人救えば、十年には百人、百年千年を経つ内には、千万の人の命を救うことが出来ると思つたのであつた。

彼は今、かれ自身でなければ出来ない、大いなる使命を見出したのだ！

誰の前にも、彼でなければ出来ない使命が訪れる。

その声は、覚めた者にしか聞えない。

それを知る。知つても、その機会をとりがす。

凡々の一生を終るのか、大きな足跡を地上に印するのか。

独力

彼は羅漢寺の宿坊に宿りながら、村々を勧化して、墜道開鑿の大業の寄進を求めたが、何人もこの風来僧の言葉に、耳を傾ける者はなかつた。

「三町をも超える大盤石を、くり貫こうと云ふ風狂人じゃ。ハハハハハハ。」と笑うものはまだよかつた。

「大騙りじゃ、針のみぞから天をのぞくようなことを言い前にして、金を集めようという、大騙りじゃ。」と中には彼の勧説に迫害を加える者さえあつた。

市九郎は十日間、徒らな勧進に努めたが、何人もが耳を傾けぬのを知ると、奮然として、独力この大業に当ることを決した。

彼は石工の持つ鎚と鑿とを手に入れて、この大絶壁の一端に立つた。

「とうとう気が狂つた！」

と通行人は市九郎の姿を指しながら笑つた。

が、市九郎は屈しなかつた。山国川の清流に沐浴して観世音菩薩を念じながら、渾身の力をこめて第一の鎚を下した。

ただ二三片の碎片が飛び散つたばかり、

第二の鎚、更に二三片の小塊が巨大なる無限大の大塊から分離したばかり……。

何か思いたつ。一夜眠られないほど興奮する。

それを友人に語る。一言のもとに出来るものかと、つきはなされる。

力を落してやめる。第一の試練に落第したのである。

独力で立て、笑われてもいい。

了海がノミ一丁持つて立つた。この意気、彼は我らに何を語るか。

我らは、今、この更生したる大悪人市九郎、否大願の前に立つて肅々と歩む聖者了海の前に、厳肅に何かを学ぼう。

人生はいつたい誰の手にあるのか。

真のよろこび

彼は空腹を感じれば、近郷を托鉢し、腹満つれば絶壁に向つて鎚を下した。懈怠の心を生ずれば仏を念じて勇猛の心を振り起した。

一日、二日、三日、市九郎の努力は間断なく続いた。ち

旅人はその傍を通る度に嘲笑の声を送った。彼は嗤笑の声を聞けば、更に鎚を持つ手に力をこめた。やがて市九郎は、雨露を凌ぐために、絶壁に近く木小屋を立てた。朝は山国川の流れが星の光を映す頃から起き出で、夕はせせらぎの音が寂靜の天地に澄みかえる頃まで止めなかった。

彼の心には何の雑念も起らなかった。

人を殺した悔恨もそこには無かった。

極楽に生れようといふ功利的な心もなかった。たゞそこには全身全霊を打ち込んだ精進があるばかりであった。

彼は出家して以来、夜毎の寢覚めに、身を苦しめた自分の悪業の記憶が、日に薄らいでゆくのを感じた。

新しい年が来た。春が来て、夏が来て。早くも一年が経った。市九郎の努力は空しくはなかった。大絶壁の一端に、深さ一丈に近い洞窟が穿たれていた。ほんの小さい洞窟ではあったが、市九郎の強い意志は最初の爪痕を明らかに止めた。

けれども近郷の人々は市九郎を笑った。

「あれを見られい、狂人坊主があれだけ掘りおった。一年の間もがいてたつたあれだけじゃ。」

けれども彼にとつては自分の掘り穿った穴を見ると涙が出るほど嬉しかった。それは如何に浅くとも自分の精進の力の如実の現われであったからだ。

ああ、努力精進によつて穿つたこの洞窟。

人生といふ大絶壁。

汝は正しい意志のノミと努力の鎚とを持って、この大絶壁に向かつて起ちたることありや。

而してその成された市九郎の喜びを感じたることありや。

彼は今過去と全く相違した聖なる大樂のひらめきを受け取った。

ただ奮闘

洞窟の外には日が輝き月が照り雨が降り嵐が荒んだ。が、洞窟の中には間断なき鎚の音のみがあった。彼にとつてはただ右の腕を振うことのみが彼の宗教的生活の凡てであつた。

二年の終りにも里人はなお嘲笑を止めなかった。

しかし、それはもう声にまでは出て来なかった。ただ市九郎の姿を見た後、顔を見合わせてたがいな笑いあうだけであつた。

さらに又一年経った。鎚の音に変わりは無い。山国川の水音と同じく不断に響いた。村人たちはもう何も言わなくなった。

彼らの嗤笑の表情は何時の間にか驚異のそれに変つた。

梳らざれば頭髮は何時の間にか双肩をおおい、浴せざれば垢づきて人間とも見えなかつた。自分の掘り穿った洞窟のうちに獣の如くうごめきながら、狂気の如くその鎚を振いつづけていたのである。

里人の驚異は何時の間にか同情に変わった。托鉢の行脚に出かけようとすると、入口に思いがけなく一碗の齋を見出すことが多くなつた。彼は托鉢の時間を更に絶壁に向うことが出来た。

四年目の終りが来た。洞窟はもはや五丈の深さに達していた。しかしこの三町を超ゆる絶壁にくらぶれば、そこになお亡羊の嘆があつた。里人は彼の熱心に驚いたものの、まだかくばかり見えすいた徒労に合力するものは一人もなかつた。市九郎はただ仕事三昧に入つてただ一人不絶の努力をつづけてゆく。

「可愛そうな坊様じゃ。物に狂つたと見え、あの大盤石を穿つてゆくわ。十の一も穿ち得ないで、おのれが命を終わるものを。」

しかし努力だ。一年たち、二年たち、ちょうど九年目の終りに、穴の入口より奥まで、二十二間を計るまで掘り穿つた。

一人の痩せた乞食僧の九年の力が、樋口郷の里人たちに初めて、市九郎の仕事の可能性を信ぜしめた。

九年前、市九郎の勧進を挙つて斥けた山国川に沿うた七郷の里人は、今度は自発的に開墾の寄進についた。数人の石工が市九郎の事業を援けるために雇われた。もう市九郎は孤独ではなかつた。

まず狂人扱いにされる。

そして聞くに堪えない、嘲笑や悪罵がなげられる。

それだけならいい、悪意の妨害さえ加えられる。

一年継続する。依然としてそれだ。

二年たつ、口では罵らぬようになる。

三年たつ、傍観者が沈黙する。

四年たつ、彼らはまだ手を出そうとはしない。しかし同情する。

五年たつ、何だか同情は親切に移り変る。

六年たつ、誰かゞ感心しはじめる。

七年たつ、識者の問題となる。

八年たつ、真の共鳴者が出来る。

九年たつ、心を打ち込んだ援助者が出来る。

十年たつてもまだ誰をも動かし得ない事業、それは人間に用事のない事業だ。

念願は人格を決定す。

継続は力なり。

あなたの会は振いますか。いや一向どうも、後退りで、衰えるばかりです。いったいこの辺の者は目が覚めないのですから……。いや費用がありませんから……。いや多忙ですから……。いや私どもの無力では……。

あえて問う。一度でも、全身全霊を打ち込んだことありや。身代はもちろん、食うにも困るほど徹底的にやった過去ありや。世の嘲笑をやがて沈黙せしめたる五年間の奮闘ありたるか。この奮闘の記録なくしては一切の事業成就することなし。

光明団生れて十有余年、市九郎の心事を念うて涙ぐむ。雨の日も風の日も、私の心中ただ、無力なる者の死にもぐるい奮闘があつただけだ。

光明誌がまだ謄写刷であつた頃、援助者が誰もなくなつて、右手にまめが出来、やがて血が出るのを我慢してやつと毎号を出した頃のことと思われる。

印刷費がたまって身動きが出来ず、やつと送つた金は不心得の男の遊興に使われて、困りぬいた日の経験。

書物を持つて古本屋に弟の学資を造りに行く日の悲哀、

五拾銭の金さえなくて、食事の出来なかつた日の記憶、

弱い私を不斷に生かして継続せしめた、大きな彼のみ心に合掌する。

しかして私を助けて生かして下さつた多くの同胞たちに合掌する。

不退転……勝利

しかし翌年が来た。里人達が工事を測つた時、夫がまだ四分の一にも達していないのを発見すると、里人は再び落胆疑惑の声をもらした。

「人を増しても、とても成就しない事じゃ。あたたら海どのに騙されて入らぬ物入した。」

一人去り二人去り、ついに一人もいなくなつた。又も了海の鎚を振ひつづける音のみ聞える。洞窟が深くなるにつれて、市九郎の姿は人々の眼から遠ざかつた。市九郎の存在は念頭からしばしば消失せんとした。彼の存在が里人に対して没交渉である如く、里人の存在もまた市九郎に没交渉であつた。彼には眼前の大岩壁のみが存在するばかりだつた。

市九郎が洞窟に端座してからもはや十年、暗澹たる冷たい石の上に座り続けたために、顔は色青ざめ、双の眼はくぼんで、肉は落ち、骨は露われ、この世に生ける人も見えなかつたが、彼の心には不退転の勇猛心が燃えさかつて、ただ一念、穿ち進む外に何もものもなかつた。

一人取り残されてまた三年たつた。里人の注意は再びこの事業の上に注がれた。洞窟の深さ全長六十五間、川に面して採光の窓がうがたれ、もはやこの大岩石の三分の一は主として市九郎によつて貫かれていることがわかつた。

彼らは再び驚きの眼を見はつた。市九郎に対する尊敬の念は、再び復活して、寄進された十人近い石工の鎚の音が、市九郎のそれに和した。又一年たつた。里人達は何時しか目先きの遠い出費を悔いはじめた。寄進の人夫は再び彼の身边から去つた。

傍に人がいなくても市九郎の鎚の力は変らない。彼はたゞ機械の如く渾身の力を入れて鎚をあげて、振り降す。彼は一切を忘れた。過去の罪悪も、彼自身の一身さへも。

一年たち二年たち、一念の動く所、彼の瘦腕は、鉄の如く屈しなかつた。ちようど十八年目に二分の一を穿っていた。里人はこの恐るべき奇蹟を見ると、もはや市九郎の仕事を少しも疑わなかつた。彼らは前二回の懈怠を心から恥じ、七郷の人は合力の誠をつくして挙つて彼を援けはじめた。その歳、中津藩の郡奉行が巡親して市九郎に対して、奇特の言葉を下した。三十人に近い石夫が毎日働いてゆく。工事は枯葉を焼くように進んだ、市九郎の態度に変わりはない。

二十年に近い市九郎の奮闘は彼を全く不具者にしてしまつた。両脚は長い端座に傷み、何時の間にか屈伸の自在を欠いで、僅かの歩行にも杖によらねばならなかつた。その上永い間、闇に端座して日光を見なかつたためと、彼の身辺に飛び碎けた石の碎片がその眼を傷つけたためであろう、彼の両眼はモウロウとして光を失い、物のいろも弁へかねるようになっていた。

不退転の市九郎にも、身に迫る老衰を痛む心があつた。中道にして斃れることを何よりも無念に思つた。

「もう二年の辛抱じゃ……」と心に叫んで、懸命に鎚を振うのであつた。

民衆、それほど不可測で、あてにならず、又恐ろしい力を持ったものはない。

ちよつと感心すればついてくるのもこれである。力にしたかと思つたと去つてゆくものも民衆である。

光明団五周年大会、あの素晴らしい盛大な記念講演会は誰がしたのか。

魔の手が動く。さつと去つて行つて、路傍に独り戦わねばならなかつたのは誰がしたのだ。しかし民衆は動かないように見えてこれほど正直なものはない。

大衆の力なくして出来た大事業があり得るか。

真に大衆を動かした市九郎二十年の孤軍奮闘、彼は今や、菩薩の聖座に不滅の光を握る。たとえこの事業が全部失敗にきしても、彼の中に輝くものは不朽である。

彼はついに勝つたのだ。

市九郎のために、非業の横死を遂げた中川三郎兵衛の一子実之助は、三蔵の時自分の父が非業の死を遂げたことを、十三になつた時に聞かされた。無念の憤りに燃えた彼は、復讐の一念を肝深く銘じて、柳生の道場に入った。十九の年、免許皆伝を許されて直ちに仇討の旅に上つた。彼は市九郎の所在を探して、馴れぬ旅路に、多くの艱難を経つゝ、全国至る所に漂泊の旅路をつゞけて、二十七歳になつた。江戸を立つて九年目、彼は九州地にわたり、中津の城下に入つてから思いがけなく、了海と名告る市九郎のことを知ることが出来た。

彼は洞窟の前に立つた。多年の怨敵が、囊中の鼠の如く目前に置かれてあるのを喜んだ。その下に使わるゝ石工が、幾人いようとも斬り殺すに何の雑作もあるべきと勇み立つた。

『其方に少し頼みがある。了海どのに御意得たいため、はるばる参つたものじゃと伝えてくれ』

石工が洞窟の中へ入った後で、実之助は一刀の目くぎをうるおした。彼は心の中で生来初めて廻りあう敵の容貌を想像した。しかし暫くして実之助の面前に表われたのは一人の乞食僧であつた。彼の想像は全く裏切られた。

それは出て来るといふよりも、墓の如くはい出たといふ方が適當であつた。それは人間というよりも、むしろ人間の残骸といふべきであつた、肉悉く落ちて骨露われ、脚は処々腫れて永く正視するに堪えなかつた。破れた法衣に依つて、僧形とは知れるものゝ、頭髮は長く延びて皺だらけの額をおおっている。灰色の限をしばたゝきながら実之助を見上げて、

「老眼衰えまして、何れの方とも弁え兼ねます。」

実之助の張りつめた心はこの老僧を一目見た刹那、タジ／＼となつてしまつた。彼の前には人間とも死骸ともつかぬ半死の老僧がうづくまつているのである。彼はこんな敵を求めていたのではない。しかし彼は失望の心を励まして、

「了海とやら、いかに僧形に身をやつすとも、よも忘れは致すまい。汝市九郎と呼ばれし若年の砌、主人中川三郎兵衛を打つて立退いた覚えがあるう。それがしは三郎兵衛の一子実之助と申すものじゃ。もはや逃れぬ所と覚悟せよ。」

許すまじき厳正な実之助の言葉の前にも市九郎は少しもおどろかなかつた。

「如何さま、中川様の御子息実之助様か、いや御父上を打つて立退いた者、此の了海に相違ござりませぬ。」

「主を打つて立退いた非道の汝を打つために十年に近い年月を艱難うぢの裡うちに過したわ。ここで会うからは、もはや逃れぬ所と、尋常に勝負せよ。」

「実之助様いざ斬りなされませ。お聞き及びもなされたろうが、之は了海奴が、罪亡ばしに掘り穿とうと存じた洞門でござるが、十九年の歳月を費やし九分迄は竣工した。了海身を果つるとも、もはや年を重ねずして成り申さう。御身の手にかゝり此の洞門の入口に血を流して人柱となり申さば、はや思い残すこともございませぬ。」

実之助は、牛死の老僧の言葉を聞いて、敵として持つていた憎しみの心は消え失せているのを覺えた。

しかし敵を討たねば江戸へ帰り、家名再興のよすがはなかつた。

その時洞窟の中から走り出た石工たちは、了海の身の危急を知つて、身をかぼうた。そして実之助の前に石工の棟領が進み出でて、

「お武家棟もお聞き及びでもござろうが、この墜道は、了海様一生の大誓願にて、二十年に近き御辛苦に身心を碎かれたのじゃ。いかに御自身の悪業とはいえ、大願成就を目前に置きながらお果てなされること、加何ばかり無念であろう。我らのたつてのお願いは、長くとは申さぬ。このくりぬきの通じ申す間、了海様のお命を我らに預けては下さらぬか。くりぬきさえ通じた節は、即座に了海様を存分になさりませ。」

彼の誠を表わしての哀願はかなえられた。

了海は再び中に入った。実之助は初め石工たちに張番されながらも、隙を伺うて一刀のもとに斬ろうとしたことさえあった。けれども洞窟の奥深く、深更まで経を誦じ、念仏しつつ鎚を打ち下ろす了海の姿は、全てこれ人間ではなかった。喜怒哀楽の情を超え、たゞ鉄鎚を振っている勇猛精進の菩薩そのものであった。太刀の柄を握りしめた実之助はふと我に帰って、既に仏心を得て衆生のために碎身の苦をなめている高德の聖に対し、深夜の闇に乗じて獣の如く、瞋恚の剣を抜きそばめている自分を顧ると、彼は強い戦慄が身体を伝って流れるのを感じた。

それから間もなく、工事に従う石工の中に武家姿の実之助の姿が見られた。

それは了海が樋田の絶壁に第一の鎚を下ろしてから二十年目、実之助が了海にめぐり会って一年六ヶ月をへた、延亨三年九月十日の夜であった。

石工どもが悉く退いた後、了海と実之助のみ終日の疲労にめげず懸命に鎚を振っていた。その夜の九ツに近き頃、了海が力をこめて振り下した鎚が、朽木を打つが如く何の手応えもなく鎚を持った右の掌が岩に当たったので、彼は「アツ」と思わず声をあげた。その時であった。了海のモウロウたる老眼にはまぎれもなくそこに破れた小さな穴から、月の光に照された山国川の相が、歴々ありありと映ったのである。

了海は「おう！」と全身をふるわせて名状しがたい叫声をあげたかと思うと、それにつづいて狂したかと思われるような、歓喜の泣き笑いが、洞窟を物凄く動揺どよめかしたのである。

「実之助どの、御覚下されい。二十一年の大誓願、はしなくも今宵成就いたしました。」と言いながら、敵と敵とは、そこに手を執り合うて、大歓喜の涙に咽んだのであった。が、暫くすると了海は、

「いざ実之助殿、約束の日じゃ、お斬りなされい。かゝる法悦の真中に往生致すは拙者の本懐これにすぎるものはござらぬ。明日となれば石工共が妨げ致そう。いざお斬りなされい。」

寛之助は了海の前に手をこまねいて座つたまゝ、涙に咽びいるばかりであった。心の底から湧き出る歓喜に泣くしなびた老僧の顔を見てみると、彼を敵として殺そうなどとは思ひも及ばぬ事であった。仇を打つなどといふよりも、このか弱い人間の腕に依つて成し遂げられた偉業に対する驚異と感激の心とで胸が一ぱいであった。彼はいざりよりながら再び老僧の手をとつた。二人はそこに全てを忘れて感激の涙に咽び合うのであった。

覚めたる了海は敵となれる実之助の前からも、逃げようとはしなかった。罪業を一身に荷負つて立つ、これ救われたる者の態度である。

彼はとう／＼二十一年の大奮闘によつて、この夢だといわれた大事業を成就した。一行を執持する所、万徳を内具し、成就する。

何時の間にか、彼の全生涯は、尊き菩薩の聖壇におかれた。

この仏心によつて浄化された人間ならぬ人間には、敵の刃さえ向けようがなかった。

彼の大菩提心も、大願成就も、もとは彼の半生の大罪惡から生れた。救われたとは死んでいた過去が生きて来たものを言うことである。

彼の過去は全く清められた。

彼は今、崇高なる大歓喜の中に敵の心さえ融かして行つた。

一切の恩讐を超えた彼方に、万人共に生くべき世界がある。彼はその世界の不滅の光を生きていた。

ああ、彼岸。そこからは万人の上に不断に何ものかが流れ、おとづれ、よびかけている。この光に生きる者いくばくぞ。（菊池寛氏「恩讐の彼方に」による）